

明治時代の三越 ―デパートの誕生―

清水一郎 (S48年入社、幹事)



これらの12枚の絵画は、明治30年代に三越が製作したカタログです。この12枚の絵画に目録と表紙をつけて1冊のカタログに仕立て上げました。実はこの12枚はオリジナルの版画で、つまり印刷ではなく本物の摺物(すりもの)をカタログにしたものなのです。作者は美人画で有名な鍋木清方の師匠で

明治時代の三越 —デパートの誕生—

当時の人気画家水野年方です。各季節の風物詩とともに最新の和装柄や子供の洋服などを紹介するという目的を持った贅沢なカタログです。この時代三越に意匠部が新設され、美人画のポスターや冊子、パンフレットなどによる宣伝戦略により当時の流行の先頭を走っていました。明治41年には専属図案家として杉浦非水が入社します。

明治維新は特異な政変と言えるかもしれません。民衆が蜂起して革命を起こした訳でもなく、どこかの国の植民地になった訳でもないのに、自国の文化を捨ててまで急激な西欧化をひたすら目指した時代でした。勿論、西南戦争のように一部の土族による反乱はありましたが、概ねこれほど穏便に政治体制が移行した例は少ないのではないのでしょうか。

明治37年(1904)、三越はデパートメントストア宣言をします。日本で初めての本格的なデパートの誕生です。そしてそれは三井家からの完全分離を意味するものでもありました。

1673年に三井高利が創業した「越後屋」は「現銀掛け値なし」などの画期的な商法で江戸随一どころか当時世界最大の量販店として繁栄を極めます。

しかし明治維新後の急激な社会変化により明治5年に時の政府より三井家に対し呉服部門の切り離しを勧告されます。

当時越後屋は、不良債権(滞り銀)が明治元年時点で約1万両に達していて、三井の大元方へ利益金を上納する事もできなかった。その額江戸後期からの累計で約14万両。この難局を救ったのが三野村利左衛門で、三井の「三」と越後屋の「越」を屋号とした三越家を新たに興し存続を図ります。

明治維新後の混乱と、明治政府の廃藩置県政策により上得意先の藩を失い危機に瀕していた三越が救われた瞬間でした。

その後三越は、明治27年に三井に復帰し「合名会社三井呉服店」となりますが、越後屋の栄華が蘇る訳もなく根本的なテコ入れが必要との判断もあり、三井銀行の高橋義雄を送り込みます。



明治29年
上段:通信販売の案内
中段:2階陳列場風景
下段:1階座売り風景



明治42年
岡田三郎助「むらさきしらべ」



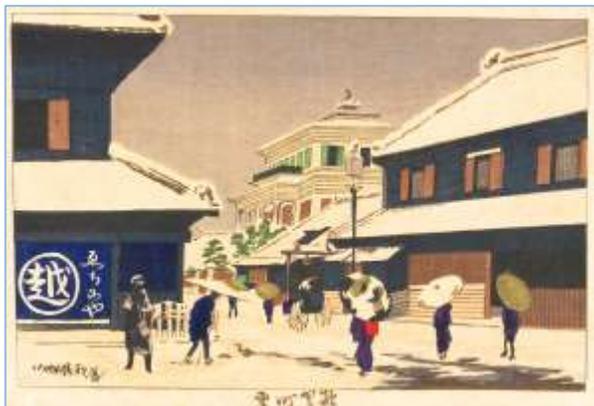
明治44年
橋口五葉「此美人」

明治時代の三越 —デパートの誕生—

高橋義雄は以前アメリカ・フィラデルフィアの百貨店「ワナ・メーカー」を詳細に視察しており、日本も企業の近代化が必須であるとの認識を持っていました。三井呉服店のトップとなった高橋は矢継ぎ早にアメリカ流の近代的な経営システムを導入します。時に番頭や手代たちの抵抗に遭いながら・・。

システムの近代化が一段落した時点で、後継者として三井から日比翁助を招聘、二人三脚で改革を押し進めます。

そして明治37年に「株式会社三越呉服店」を設立、同時にデパートメントストア宣言をします。この時三井家は、土地、建物、商品、商標等一切を13万5千円で三越に譲渡、三井から完全に分離独立します。以後三井事業史に三越の名前が載る事はなくなります。



前述の通り、越後屋は明治5年に三井を離れ、新たに「三越家」を起こします。左の浮世絵には三井の商標が掲げられていますから、おそらくは明治5年以前の様子で、右の絵には“マル越”の商標が見えますから、それ以後明治27年に三井に復帰するまでの間の様子ではないかと思えます。

時系列で辿ると、三越は明治維新後の明治5年に三井から分離、明治27年に三井に復帰、そして明治37年に再び三井から分離し、以後は独立した企業として存続します。その事はロゴマークの変遷を見ると良く分かります。

ロゴマークの変遷



越後屋、えちごや
(天和元年(1681) ~明治5年)



越後屋、えちごや
(明治5年~29年)



三井呉服店
(明治29年~37年)



三越呉服店
(明治37年~昭和3年)



三越
(昭和3年~60年)

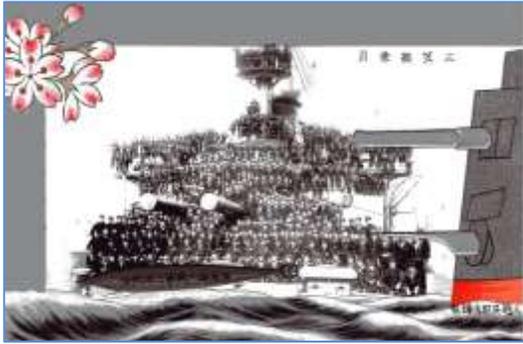


三越
(昭和60年~)

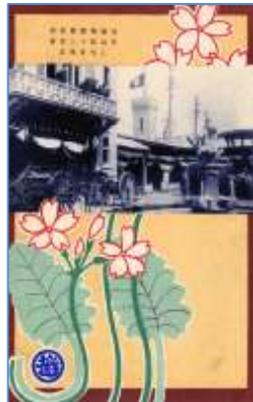
明治時代の三越 —デパートの誕生—

当時三越は様々な絵葉書を制作、コミュニケーションツールとして活用していました。DMとして、来店記念品として、特別な顧客への挨拶状として・・・

いくつかの絵葉書をご紹介します。



この3枚の絵葉書は、「日本海々戦 第三回紀念」と銘打たれており、旗艦「三笠」の遺族と搭乗員に挨拶状とともに三越が送った絵葉書です。エンボス加工を施した当時の先端技術を取り入れたものでした。



明治40年には「流行会」の提案により「児童博覧会」を開催。屋上に動物園を開園するなど子供たちに大人気の催物となります。

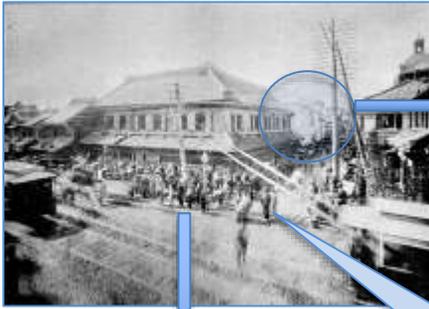
遊園地のなかった時代、建物の外観をお城風に装飾するなどハード、ソフト両面で子供たちをもてなしました。

もちろん規模は違いますが、後のディズニーランド並みに楽しい場となったと思います。

親子連れですから、その辺りのマーケティングもしっかりしていたようです。



明治時代の三越 —デパートの誕生—



土蔵造りの旧店舗
の西側(皇居側)
に仮営業所開設



明治41年仮営業所オープン当日のにぎわい
旧店舗にまで列がのびて
きています



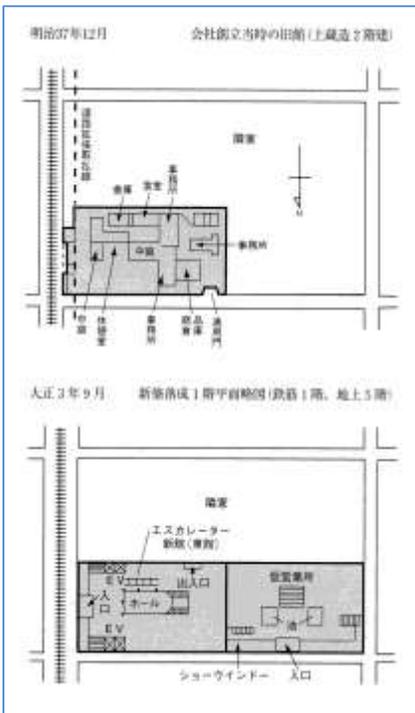
旧店舗の跡地に大正3年、
鉄筋コンクリート造りの店舗
がオープン



明治期の三越の動きはめまぐるしい。
その全てをここでご紹介することはできませんが、後
の三越の骨格が明治期に出来上がったということは
疑うべくもありません。

当時の三越は「三井家からの独立」と「新しいデ
パートの創業」と言う難問に直面していました。
店舗も、土蔵造りから仮営業所を経て、明治43年には
後に「スエズ運河以東最大の建築」と称される新
館の工事に着工するなど、新しいデパートとしてふさ
わしい器を整備します。

鎌倉時代から700年近く続いた武士の時代が終わり、
明治維新という大きな変革期に、数々の難題を知恵
とイノベーションで乗り切った先人たちの努力に心か
ら敬意を表したいと思うのです。



(参考)

- 三井文庫刊「史料が語る三井の歩み」
- 神野由紀著「趣味の誕生」
- 国立国会図書館所蔵写真
- 株式会社三越100年の記録
- Wikipedia